

# バイオものづくり革命推進事業に関するロジックモデルについての RIETI EBPM センターからのアドバイス

2024.11

RIETI EBPM センター

本アドバイスは、経済産業省における政策の効果検証をより深めていくため、大橋弘先生、北尾早霧先生、渡辺安虎先生、江藤学先生を含む RIETI EBPM センターのアドバイザリー・ボードのメンバーにご意見を頂きながら作成したものです。

## 1. 検証シナリオの評価

- 2024 年 10 月 28 日、経済産業省により本事業についてのロジックモデルおよびアウトカム指標ごとの測定手法が公表された。
- このロジックモデルにおいては、国際競争力と環境負荷低減の二双方を目的とした政策に対して、インパクトに至る経路が複線化されて表現されている。短期、中期、長期のアウトカム同士の繋がりや、事業実施期間中見直しの明記もされており、基金を造成して行う中長期的な研究開発事業として概ね妥当なものである。
- 研究開発期間中のステージゲートが迫っている事業もあり、このロジックモデルにおいて整理した考え方、目標とする指標を見据えながら、事業の見直しや加速等の判断に活用していくことが強く望まれる。

## 2. 今後に向けて

- 上記評価を踏まえつつ、今回の取組を政策形成に生かしていくという観点から、今後中長期的に検討していくべき点について述べる。
- 政策評価の基本である「政策がなかった場合と比較してどのような効果があったか」という考え方に則り、この事業がなかった場合との比較を考えることも重要である。 長期に渉る大規模な技術開発プロジェクトである本事業の性質上、厳密に比較することは難しいと思われるが、本事業が無かった場合に現状と比べどのような違いが発生したかを企業に聞く等の方法も一案である。

- 本事業以外についても、公募の段階で全ての企業に情報提供を義務付ける等により、**長期的には、補助金を受け取っている企業だけでなく、受け取っていない企業についても状況を把握する体制を整備することが、政策立案そのものにも有用**であると考えられる。
- EBPM という観点では、まずは事業期間中に本ロジックモデルに即した事業の見直しをアジャイルに行っていくことが重要である。そのうえで同時に長期の状況変化を踏まえ、本モデルがプロジェクトの固定化に繋がらないよう、必要に応じ、実態に合わせて継続して見直していくことも検討していただくことが望ましい。その際、**国内外の研究開発プロジェクトの効果測定・管理手法も参考にしながら、同様の事業の成功または失敗の要因に学びつつ、フィードバックをかけながら最終的なアウトカムに繋げていくという視点は重要にされたい。**
- 本事業に関わらず、事業の経済的な波及効果については産業構造の変化を伴うものであることから、マクロ的な視点でどのように日本経済への経済効果を考えるかについても検討することが望ましい。この点についてはRIETIで進行中の研究等の成果活用も含め、知見を蓄積していくことが望ましい。

以上